



# 後藤良輔さん

Ryosuke Goto

インタビュー メイショウサムソンの故郷、家族経営の林孝輝牧場で働く

## 小さな牧場から二冠馬 身震いした東京優駿

「行けーっ」。振り絞る声が部屋中に響く。ブラウン管の向こうでは全てのホースマンがこがれる最高の舞台が佳境に入っていた。第73回日本ダービー、最後の直線。大声援のなか、皐月賞を制した1番人気のメイショウサムソンがクビ差の接戦をモノにした。春のクラシック二冠制覇を達成した皐月の優駿。その故郷が北海道浦河町の林孝輝牧場である。大規模牧場が絶大な勢力を誇る競馬界にあって、「夫婦と若いスタッフの3人で繁殖牝馬10頭を扱っている。この小さな牧場からメイショウサムソンは誕生したのだ。」

### 大地と緑とあたたかい人の中で、 大好きな馬と共生できる喜びを 一日一日かみしめて働いています。



profile ごとう・りょうすけさん (林孝輝牧場)

▶昭和56年10月生まれ、福智町赤池出身、24歳。赤池中を卒業後、単身北海道へ渡り門別町の牧場で5年間、2年前から浦河町の林孝輝牧場で働いている。後藤さんが林孝輝牧場を訪れたとき、二冠馬メイショウサムソンは1歳。体が丈夫で、人なつっこい馬だったという。母親マイヴィギアン(写真右)の名前から「ヴィヴィ」と呼ばれ、かわいがられていた。優駿を生んだ母馬は牧場の救世主、後藤さんいわく「ヴィヴィ様と呼べる存在」なのだとか。左はマイヴィギアンの子馬。

駿(日本ダービー)は3歳の最強馬決定戦。家族経営の牧場から生まれた奇跡の馬は栄光のゴールに駆け込み8千823頭の頂点に立った。

## カバン一つで北海道へ 尽きなかった馬への憧れ

「それはもう、おじいちゃんおばあちゃん絶叫ですよ。信じられませんでした。宝くじが当たったみたいで。」  
2年前から林孝輝牧場で働く後藤良輔さん。ここで唯一のスタッフ、福智町赤池出身である。根つから馬好き。赤池中を卒業後、進学先の迷いもなくポストンバック一つで北海道へ渡った。門別町の牧場で5年働き、いったん赤池に戻った後、今は林孝輝牧場で大好きな馬の世話をしている。  
「北海道での1年目はきつかったですね、1か月はホームシックになりました。真っ白な雪を見て感動しました」

が翌年にはちょっとうんざり、だけど馬に触られる生活はいもんでしたね」と後藤さん。赤池に戻って別の仕事をしてみただけ、馬へのあこがれは尽きることなく、むしろ膨らんでいった。馬が忘れられなかった。やがて意を決し、牧場に電話をかけて回る。数日後、電話先からの紹介で勧められたのが、ここ林孝輝牧場だった。

## サムソンもデビューした 小倉競馬場で馬に惚れた

「社長も奥さんも、おじいちゃんもおばあちゃんも本当にいい人で、すごく感謝しています。みなさんに囲まれて、好きな馬、好きな仕事ができるんですから、もう言うことないですね」と笑う後藤さん。牧場では「お兄ちゃん」と呼ばれ、家族のように接してもらっている。九州育ちに心配な寒さにもめっぽう強く、風邪をひいたことがない



【メイショウサムソン】  
2003年3月7日生/牡3/鹿毛  
父：オペラハウス  
母：マイヴィギアン  
(父ダテシンブツブツ)  
馬主：松本好雄氏(東京優駿初勝利)  
調教師：瀬戸口勉  
生産牧場：林孝輝牧場(北海道浦河町)  
連算成績：11戦6勝  
主な勝ち鞍：2006日本ダービー(GI)  
2006皐月賞(GI)スプリングS(GII)  
※写真：東京優駿でのメイショウサムソン、石橋守騎手もダービー初勝利となった。小倉競馬場デビュー馬の勝利も前例がない。(写真：競馬ブック)

## 好きなことが仕事である という幸せ

「その日その日が充実している」という後藤さん。「馬の立場になって愛情を注がないとダメ、うちは小さな牧場だけど、馬にできる限りのことを精いっぱいしてあげたいんだ」という場主・林孝輝さんの言葉を胸に、好きな仕事を黙々とこなしている。

「自分は異性より動物に好かれる方表に出る人間じゃないし、コツコツやって陰から支える役目に向いています。将来の目標はまだ見えていませんが、この牧場の歴史の瞬間に立ち会えたことがうれしいです、自分がかかわった馬がレースで走っている姿を見るとたまりません。今は一日一日を楽しみながら、馬と接していきたいです。」  
後藤さんが「奥さん」と呼んでいる場主の妻・林美鈴さんは言う。  
「お兄ちゃん(後藤さん)は仕事熱心で真面目。馬に接する姿から『本当に好きなんだな』っていうのが伝わっ

という。幼いとき父に連れられた小倉競馬場で馬に惚れ、風を切って走る姿がたまらず好きになった。

「息子は中途半端な気持ちではなく真剣でした。やりたいことをさせたいたいと思って『行つてこい』と背中をたたき、送り出しました」と3人兄弟の末っ子を見送った父・勝さんは振り返る。

牧場の朝は早い。午前5時から馬にエサをやりブラッシング↓放牧後、馬房の寝糞出しと清掃↓午前8時過ぎ自分たちの朝食↓干し藁を返してから牧場の清掃↓自分たちの昼食↓干し藁を馬房に午後5時、馬を厩舎に戻す↓エサの準備と片付け↓6時半ごろ自分たちの夕食↓午後9時、夜飼(馬の夜食)↓10時半ごろ就寝。という後藤さんの一日の流れだ。特に出産、種付けの春は、日ごろのサイクルに膨大な作業が加わり、観察や注意力も必要になる。3人がまさにフル稼働となる。

てきます。うちの牧場は人の巡り会いが重なるって、ここまでやってこれました。出会えた縁、人とのつながりのすばらしさをつくづく感じています。うちのお兄ちゃんもいい縁、いい巡り会いの大切な人。頼りにしています。携わってきた人たちの思いと声援を受けてひた走るメイショウサムソン。キャリア10戦目にして皐月賞、11戦目で日本ダービーを制覇した。地道に馬づくりを重ねてきた故郷と同様、走るたびに強くなるたくましさアピールしてきた。目指すは10月22日の菊花賞、夢の頂点「三冠」がかかっている。  
後藤さんもまた大好きな馬の仕事で地道に頑張っている。時にはだからやっとならざる。だけど好きだからやっとならざる。好きだから追求できる。高められる。「好きなことが仕事である幸せ」をいま、北海道の大地でかみしめながら、後藤良輔さんは今日も馬とふれあう。その目には何の迷いも映ってはいない。  
(写真協力：提供/北海道浦河町)



【林孝輝牧場】開業：昭和31年/所在地：北海道浦河町/敷地面積：約20ha/繁殖牝馬：10頭